

平成30年6月5日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02629

研究課題名(和文) 学部留学生の講義聴解力を伸ばすための談話表現の研究

研究課題名(英文) Study of discourse expressions for improvement of foreign students' listening comprehension of Japanese university lectures

研究代表者

渡辺 文生 (WATANABE, Fumio)

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：00212324

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、大学で学ぶ留学生が日本語の講義を理解するのに手がかりとなる表現を、講義の談話の分析をとおして抽出し、聴解テストによる理解実験をとおし講義の聴解力を伸ばす指導法を探ることである。研究の結果、トピックセンテンスに関わるメタ言語表現を捉えられるかどうか講義の理解に影響を与えること、特に難易度の高い問いにおいてその傾向が高いことが分かった。メタ言語表現に着目した聴解指導の有効性を示すものと言える。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to extract key expressions for foreign students in Japan to comprehend Japanese university lectures through the analysis of lecture discourse, and to investigate effective instruction to improve foreign students' listening comprehension of Japanese lectures through the analysis of experimental listening tasks. The results of the research show that students' awareness of the meta-linguistic expressions in topic sentences correlated with the comprehension of lectures, and that the more difficult the task was, the higher correlation the results had. These results suggest the effectiveness of listening instruction focused on meta-linguistic expressions.

研究分野：日本語学

キーワード：談話分析 講義の談話 聴解 トピックセンテンス メタ言語表現 ノートテイキング 学部留学生

1. 研究開始当初の背景

2020年を目途に留学生受入れ30万人を目指す「留学生30万人計画」が推進され、日本国内の各大学における学部留学生の大幅な増加が予定されている。学部の新入生として入学して来る留学生にしても、外国の大学から短期留学でやってくる留学生にしても、日本の大学で単位を履修しようとするためには、多くの場合日本語で行われる授業に出席しなければならない。初年度の授業の多くは講義形式の授業が多く、大学に入学したばかりの留学生は、90分に渡る長い講義を聞くことになる。

このような状況を考えると、留学生の日本語による講義の理解をどのように支援するかは、大学における日本語教育の大きな課題の一つであるが、講義が談話として大きいデータであるために分析しにくいことや、講義の理解の仕方についてもバリエーションがあることなどから、講義の談話構造や学習支援の研究はあまり行われてこなかった。そのような中で、早稲田大学の佐久間まゆみ教授を中心とした研究グループが講義の構造面の分析と日本人大学生による講義理解の諸相の解明を目指した共同研究の成果として佐久間(2010)が出版され、同グループによる平成23年度から平成25年度までの基盤研究(B)の研究では、さらに講義の構造分析と外国人留学生の講義理解のデータ収集・分析を行った。本研究課題の代表者もグループの一員として参加したこれらの研究では、「話段」のほか「文型」などの分析単位を用いた講義の談話の緻密な分析と、受講者の講義ノートや講義後の要約文、インタビュー談話などを用いた講義理解の分析を行ったという点で、特筆すべき研究だったと言えるが、以下のような課題もあった。

1) データが膨大で分析できる講義の種類が制限されること：大学の講義の実態を解明するという点では、90分の講義を研究対象にすることは重要なことと言えるが、談話データにせよ受講者の理解データにせよ1つの講義のデータを分析するだけでも膨大な時間がかかる。多様なパターンの講義をもとに理解実験を行うにはもっと短い講義の素材が必要である。

2) 講義理解に対する評価の視点をどう取り込むか：上記の研究プロジェクトでは、講義を聞いた受講者がどのように理解したことを再生するかという観点での分析が主体で、講義者が伝えようとしたことをどれくらい理解したかという評価的な観点での分析は行われなかった。講義理解を支援する方法を探るためには、評価的な観点での分析が必要と思われる。

2. 研究の目的

本研究は、上記の学術的背景および申請者のこれまでの講義の談話に関する研究の経験・成果を生かして、大学で学ぶ留学生が日

本語の講義を理解するのに手がかりとなる表現を、講義の談話の分析をとおして抽出し、聴解テストによる理解実験をとおし講義の聴解力を伸ばす指導法を探ることを目的とする。具体的には、

1) NHK カルチャーラジオのテキストと講義をデータとした、講義談話の構造分析を行う

2) 構造分析の結果をもとに聴解テストを作成し、留学生を対象に理解実験を行う

3) 聴解が困難な文型や文構造を解明することにより、講義の聴解力を伸ばす指導法を探ることである。

3. 研究の方法

本研究の方法・手順は以下のとおりである。

1) ラジオ講義のテキストの文章と講義の談話の構造分析を行う

収録したラジオ講義を書き起し、話段を単位とした構造分析および談話において使用されている文型の分析を行い、それぞれの講義の話題展開や主題を明らかにする。その作業には、これまでの講義の研究で明らかになった、トピックセンテンスや主題文で使われる表現や文型などの知見をもとにする。このラジオ講義のプログラムは、出版されたテキストをもとに講義が行われているので、書きことばであるテキストの見出しや段落などの形式的な手がかりを用いて行うことができる。

2) 構造分析の結果をもとに聴解テストを作成し、留学生を対象に理解実験を行う

講義の談話の構造分析の結果をもとに、聴解テストを作成し、留学生を対象に理解実験を行う。理解実験は、語彙リストの提示、講義のリスニング(30分)、聴解テストという段階を踏んで行う。講義後の聴解テストでは、それぞれの講義の話段の構造を理解できているか、講義で扱われた話題を抽出できるか、話題のあいだの階層構造を理解でき正しくトピックセンテンスを抽出できるかなどを問う。

3) 聴解テストの結果をもとにした聴解が困難な文型や文構造の解明

聴解テストの結果をもとに、聴解が困難だったトピックセンテンスで使われている文型の種類や話段の構造などを分析し、聴解を困難にしている要因を解明する。

4. 研究成果

平成27年度においては、書き起こされたラジオ講義について、トピック・センテンスや主題文で使われる表現や文型などの知見をもとに、話段を単位とした構造分析および談話において使用されている文型の分析を行った。「トピック・センテンスに関するどのような文脈的要素が、受講者の講義の理解に影響するのか?」というリサーチ・クエスチョンのもと、トピック・センテンスの内容

に関するメタ情報の位置関係に注目した。たとえば、「重要な点は、...ということです。」という言い方（メタ情報先行型）と、「...ということが、重要な点です。」という言い方（メタ情報後続型）を比べてみると、前者の言いの方が、《これから述べることは重要だ》という談話の内容に関するメタ情報を前もって提示しているため、理解しやすい、または、ノートなどの記録に残しやすいのではないかと予測される。母語話者であれば、この2つのパターンの差は大きな影響を与えないかもしれないが、非母語話者では影響があるのではないかという仮説をもとに調査結果を検討していった。上級日本語学習者19名を対象とした聴解テストによる理解実験を行った結果、トピック・センテンスの叙述内容に関するメタ情報の位置関係が明確に影響するという結果は得られなかった。しかし、用語を説明するような話段においては、用語がトピック・センテンスに先行して提示される方が正答率が高いという結果であった。また、トピック・センテンスの内容をサポートする文脈が当該の話段にない場合は、理解しにくいという傾向も見られた。トピック・センテンスとそれをサポートする文脈との位置関係の影響については、トピック・センテンスがあとに現れる方が理解しやすいという傾向を示す質問もあったが、関連語句の反復など様々な要因と連動していることが示唆された。

平成28年度においては、トピック・センテンス内のメタ言語表現の位置が受講者の理解にどう影響を与えるか、そして、その影響に関する日本語母語話者と学習者との相違について分析を行った。日本語母語話者33名、上級日本語学習者36名が約60分の講義をビデオ視聴した後に収集した講義ノート、要約文、インタビューを分析した。その結果、メタ言語表現がトピック・センテンスの叙述内容に先行した方が理解しやすいのではないかという予測を支持する結果は得られなかった。トピック・センテンス内におけるメタ言語表現の位置的効果については、関わる要因が複雑で、単純にトピック・センテンスの語順だけが結果に反映するのではないということが示唆された。また、日本語母語話者・学習者ともに、講義ノートにおける理由の記載の有無が、要約文・インタビューでの言及の有無に影響を与えていた。メタ言語表現に注意を払ったノートの取り方が、後の理解表象に影響を与えるということがわかった。

平成29年度においては、学部留学生による講義の談話の聴解に関して、講義ノートにおけるメタ言語表現に関する情報の記述、および、トピック・センテンスの内容の記述の有無と、理解テストの結果との関連について分析・考察した。たとえば、(1)のようなトピック・センテンスがあったとすると、この文の主題部は、評価型総括（西條1999）

の機能を持つメタ言語表現であり、叙述部は総括的メタ言語表現「真のテーマ」の内容を伝えているととらえることができる。

(1)このメルヘンの真のテーマは、「動物への変身」にあります。

このようなトピック・センテンスについて、メタ言語表現に関する情報がなんらかの形でノートに書かれているか、そして、トピック・センテンスの叙述内容がノートに書かれているかということが、トピック・センテンスの叙述部の内容を問うような理解テストの結果に影響しているのかどうか、「メタ言語表現に関する情報がノートに書かれている方が、理解テストの得点が高いのではないか」との仮説のもとに分析・考察を行った。上級日本語学習者27名によるラジオ講義の談話を用いた理解調査の分析の結果、1)メタ言語表現に関する情報の記述と理解テストの結果との相関は、問いの難易度によって影響を受けること、2)難易度の高い問いにおいては、メタ言語表現に関する情報がノートに記載されているかどうか、トピック・センテンスの叙述内容の記載の有無よりも高い相関を示すこと、がわかった。「メタ言語表現に関する情報がノートに書かれている方が、理解テストの得点が高いのではないか」との仮説のもとに調査・分析を行ったが、仮説に沿う傾向がすべての問いの結果には見られなかった。しかし、難易度の高い問いにおいてこの仮説に沿った傾向が現れたことは、聴解指導やノートテイキングの指導において、メタ言語表現に着目した指導の有効性を示すものととらえられる。

引用文献

西條美紀(1999)『談話におけるメタ言語の役割』風間書房
佐久間まゆみ(編)(2010)『講義の談話の表現と理解』くろしお出版

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

渡辺文生、ノートをとおして分析する日本語学習者による講義の談話の理解、2017 CAJLE Annual Conference Proceedings、査読なし、2017、279-288

渡辺文生、講義の談話においてトピック・センテンス内のメタ言語表現の位置が受講者の理解に与える影響について、2016 CAJLE Annual Conference Proceedings、査読なし、2016、286-292

渡辺文生、講義の談話におけるトピック・センテンスの聴解について、2015 CAJLE Annual Conference Proceedings、査読なし、2015、358-367

〔学会発表〕(計 3件)

渡辺文生、ノートをとおして分析する日本語学習者による講義の談話の理解、2017 CAJLE Annual Conference、カルガリー大学、2017年8月16~17日

渡辺文生、講義の談話においてトピック・センテンス内のメタ言語表現の位置が受講者の理解に与える影響について、2016 CAJLE Annual Conference、ナイアガラ・フォールズ、2016年8月17~18日

渡辺文生、講義の談話におけるトピック・センテンスの聴解について、2015 CAJLE Annual Conference、サイモン・フレーザー大学、2015年8月20~21日

〔図書〕(計 1件)

渡辺文生 他、くろしお出版、文章・談話研究と日本語教育の接点、2015、179-199

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 文生 (WATANABE, Fumio)
山形大学・人文社会科学部・教授
研究者番号：00212324

(2) 研究分担者

澤 恩嬉 (SAWA, Eunhee)
東北文教大学短期大学部・総合文化学科・准教授

研究者番号：50389699

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()